

船団



● 第81号 特集Ⅱ 俳人たちの朝食

鶏頭の句は駄作

坪内 稔典

とともに三大名句をなす。と言つても、この三大名句とは私が勝手にそのように呼んでいるのであり、客観的な裏付けがちゃんとあるわけではない。ただ、長く俳句にかかわり、俳句史などを考えてきた者の実感がこの三大名句という言い方を支えている。

話題を子規の鶏頭の句に絞ろう。この句、昭和二〇年代に起こったいわゆる鶏頭論争を通じて有名になった。その鶏頭論争については『現代俳句ハンドブック』（雄山閣）、『現代俳句大事典』（三省堂）などに要を得た解説があるが、その争点はこの句が秀句なのかどうかということ。

鶏頭の句が秀句ではないという意見の代表は、「花見客 十四五人は居りぬべし」と差がないとする志摩芳次郎の見方。志摩は「単なる報告」の句に過ぎない、と断じた。

この意見に対して、十四五本の鶏頭は子規の存在感そのもの、という見方が山口誓子、西東三鬼などから出された。同じような見方は昭和の初めに斎藤茂吉が示していた。山本健吉は『現代俳句』（角川文庫）において、この句をめぐる右のような読み方を概括し、十四五本の鶏頭は病床の子規の「たぐいなく鮮やかな心象風景」なのだとした。つまり、鶏頭の存在感は子規のそれに重なる、というのである。

右の山本の読み方は、子規という作者を読みの文脈に入

俳人の中で有名な句がある。

鶏頭の十四五本もありぬべし

正岡子規

流れ行く大根の葉の早さかな

高浜虚子

一月の川一月の谷の中

飯田龍太

たとえばこのような句。あちこちで俳人たちがよく話題にするし、それぞれの作者の代表作と見なされることもある。だが、俳人（俳句誌の主宰者、俳句誌の同人など）が推奨するこれらの句ははたして名句なのだろうか。名句とは今の場合、一般の人々にも愛唱される句を指す。子規の句でいえば、

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

がその名句。子規のこの句は、

古池や蛙飛びこむ水の音

芭蕉

菜の花や月は東に日は西に

蕪村

れている。近年、司馬遼太郎は、この句をやはり高く評価して、「つねに末期の思いのなかにいる子規にとつて、その瞬間、小庭の陽溜まりにある鶏頭の一群だけがこの世だつたにちがいない。」（沈黙の五秒間―私にとつての子規〔一九九五年〕と述べているが、これはあきらかに末期の子規という作者を前提として句を読んでいる。

冒頭にあげた鶏頭の句以下の三句は、作者を文脈に入れて読まれているのではないだろうか。それに対して、私が三大名句と呼ぶ句は作者を意識せずに読まれている。

俳句は作者を抜きにして詠まれてきた。定型や季語の働き、表現のさまざまな技法などが一体化して一句の素晴らしさを作りだす。作者はその表現の力を生み出す創作の主体ではあるが、決して表に現れない。それが俳句の伝統だ。今、俳句の伝統という言い方をしたが、俳句は句会を創作や鑑賞の第一の場としてきた。そこでは、句は無署名で投じられる。誰の作か分からなくして作品が鑑賞される。つまり、句会という場では作者はどうでもいいのである。肝要なのは表現そのもの。鶏頭の句も明治三十三年九月九日に子規を囲んで行われた句会で作られた。「鶏頭」が席題であり、この句、その句会ではほとんど注目されなかった。

子規という作者を読むことで、鶏頭の句は高く評価され

るようになったのではないか。この句をもう一度、作者名を消して句会に投じてみたい。そのとき、十四五本の鶏頭に末期の存在感のようなものを感じるだろうか。私見ではこの句は平凡な作、いや、語るに足らない駄作である。

ところで、鶏頭の句に作者を読む読み方は、一句と作者を取り合わせて読んでいると思われる。

「鶏頭の十四五本もありぬべし」＋「子規」

このような取り合わせがその読みにはある。その結果、十四五本の鶏頭に末期の子規の存在感が重なる。つまり、子規をよく知る人にとってはこの句が素晴らしく見える。虚子の句にしても同様だ。

「流れ行く大根の葉の早さかな」＋「虚子」

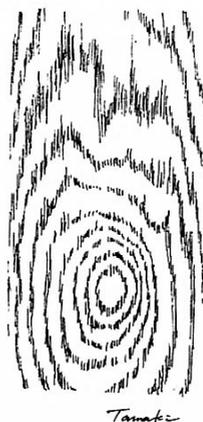
このような取り合わせとして読まれている。虚子は技法としての取り合わせを重視しないというか、むしろ嫌った俳人であるが、実はその句はしばしば取り合わせとして読まれてきた。もう一例を挙げよう。

「帚木に影といふものありにけり」＋「虚子」

この帚木の句は子規の鶏頭の句に表現のかたちがとても近い。

作者を取り合わせて読む読み方。それは作者をよく知る人だけに可能な特権的な読み方である。その特権的な読みが俳人だけに分かる特権的な句を生み出してきた。

会員作品



坪内 稔典

山眠る素焼の壺がころがって
kaZahanaYa@の以下不明
曲玉の触れる音して寒月光
梅三分どかんと父のオートバイ
独り来て比良の暮雪を遠景に
菜の花の沖に光るよ雪の比良
菜の花をてら・ブラージュという店へ

中原 幸子

あるもので済ませ銀杏の散るわ散るわ
紅葉クッキー紅葉クッキー紅葉散る
退屈な背中だ山茶花な白だ
かけ下手の切り下手冬の大三角
古希プラス一歳ミトンまっかつか
雪催い先生に酒注がせおり
春の風チヨコレートほなあさってな

火箱 游歩

ライオンのジゴロな目線冬うらら
うちむらさき剥く友情にゆきあたる
冬草にさくさくとした女の子
冬木立休め気を付けはい解散
詩人の父詩人の息子枯木星
ポチの糞ぶらさげている御慶かな
立春大吉こんにやくの落しもの

陽山 道子

星冴えて心ほぐして綺麗なジャンフ
ほろほろと押し競鰻頭弟よ
十年のここやかしこに葱人参
梅咲いてロードマップは付箋付き
菜の花やギザギザハート君にやる
比良暮雪琵琶湖は波の音ばかり
薄墨の比良の暮雪の風受けて

内田 美紗

セーターにけもののにほひやがて雨
生牡蠣をすすりよこしまなるころ
着ぶかれて防犯ミラー横切りぬ
万華鏡まはしてをれば雪が降る
固茹での玉子に噎せる久女の忌
吟行のひとり佐保姫かもしれぬ
好きにしると言はれてよりの蜷の道

岡本 高明

柚が家の干菜湯なりし手こづりぬ
ひと時雨ありし夕日の鯿見台
父の忌の寝足りて眠し枇杷の花
午からの日照雨いくたび飾壳
はすかひはミンクのをんな大根焚
妻ときて大湖の氷叩きけり
そはそはとして節分の夜空あり